

日本近代の具象彫刻は、明治期に近代国家建設のために導入された自然主義的写実表現を重視する流れと、明治末に高村光太郎らによって伝えられた、内的生命の表現を重視したロダンの彫刻観に共感する流れとに大きく二分できます。柳原義達(1910~2004)は、東京美術学校在学中に高村光太郎から強い影響を受けました。戦後は、一から彫刻研究をやり直すために留学したフランスで、フランス近代彫刻の模倣に終わることなく、自然法則に従う生命を表現するという彫刻観に開眼し、独自の具象表現を確立します。そうした柳原の彫刻観は、折々に執筆された柳原の文章にも見ることができます。以下では、そうした柳原の彫刻論の一部をご紹介します。

「ロダン」の一節

木や石、金属が素材として、ただそこに位置するだけならば、それはただ三次元の空間でしかない。この立体が生命を宿す工夫をすることが、芸術家の仕事であって、人が彫刻をすることであり、美を求めることである。

たとえば、人間はそこに立つことによって生命の本質を示す。社会のなかで生み出される人間のドラマのその以前に、立つことの不思議な努力が、足から頭の先にまで流れている。それは死と生の相異を示す。ロダンはこの不思議な流れを生命の線とみて、この周囲に量が位置を占め、また展開してゆくように努力する。そして、その量やその展開が、まるで川が流れを作るように、生命となって兩岸や川底、川面のプラ

ンの組立てを構築する。プランは幾何学的平面ではなく、波のようにその凹凸を示そうと表現されているのである。

たとえば右の方の足に重心をかければ、胴体がぐるりと回って量を移動させて平衡を作り、また頭の方に回転して上方に向うだろう。これが自然の「ねじれ」であって、ロダンは自然は螺旋だとみるのはこれがためである。彫刻家は、このような自然の息吹きを、木や石につたえて、これらの素材を彫刻にするのである。

鳩によせて

鳩は美しい。毎日の日課になっている私の素描のときは、嬉しさに身ごとよここんでくれる。

私の鳩は孔雀鳩で、その感動は白に光り、そしてゆれ動く。

あるときは一本の足に、不思議な身動きの安定を求め、あるときは両足にヒロイックなポーズを乗せる。この籠の鳥は、私のそのときどきの意志の方向に姿をかえさせられる。

あるときは風の中の鳩になり、日向ぼっこの鳩になり、嵐の中の鳩にすらなる。私の夢が自然のなかをさまようとき、私の鳩も籠からはなれたかのように思える。自然の息吹と鳩とのかかわりがいつのまにか私の素描になってくる。身動いている不思議な命に鳩がみえてくる。私は彫刻家としての喜びにこのときはひたっているのだろう。

私の手のなかで、大気にはばたく私の鳩がいて、それは空間の動きで生命の美しさを感じる。



道標・鳩(長寿の鳩) 1981年

カラス

変な趣味と思われるかもしれないが、私はカラスの庶民的な性格と、形態の美しさにひかれ、すっかりとりこになっている。カラスは彫刻の制作意欲を激しく駆り立てる存在なのである。

そもそも私がカラスを飼うようになったのは、昭和四十年、神戸市の動物愛護協会から動物愛護にちなんだ記念碑の制作を依頼されたのがきっかけだ。

どんなモチーフにすべきか、あれこれ悩んでいた私に、「子馬の背にとまるカラスを見た」と、貴重なヒントを与えてくれたのは宮崎神戸市長だ。私はこれだ、と思い約半年ばかり、神戸の動物園に日参してカラスのスケッチを続けた。鋭い口ばし、黒くつややかに輝く羽、バランスのとれた体、素早い動作。描けば描くほど、私はカラスに魅せられた。



風の中の鴉 1982年